
学
園
遍
歴

(東京住まい)

渡
辺
美
知
夫

学園遍歴（東京住まい）

渡辺美知夫

私の移動にはいつも住居の問題が付いて廻るのだが、東京に出るにつけても先ずそのことが気になった。S先生との話合いの時にも早速それを持ち出したものだ。先生はT女子大の事務長を寄越して下さり、「兵舎」に訪ねて来た彼は、その片隅の「住居」に驚いた様子で、「これが住居と云えるのか」と言った。

「兎に角一度女子大に来て、予定している家を見るがよい」とのことと、私は女子大への出張講義の合間に、構内の「住居」を見せて貰った。それは終戦直後アメリカの後援財団から贈られたという、プレハブ住宅というものであった。アメリカの人に言わせれば掘立小屋なのだろうが、焼野原と化した当時の日本、殊に東京では結構な中流住宅である。平屋建て、客間、寝室、ダイニングキッチンという構成であった。これは多賀の「官舎」に較べても、数段すぐれている。この家の構成が、後に自分で家を建てるときにも、大きく影響する

ことになる。

「この家の貸与期間は三年である。」と事務長は言った。三年先がどうなるかは見当のつけようがない。私は兎に角その舶来住宅に入れて貰うことにした。家賃も二千円かそこら払ったと記憶する。私は実はそれまで家賃というものを払った経験がなかった。大阪と神戸の丁度中間の、戦時中に西宮市に編入された今津という村の、江戸時代から続く町医者、千本格子のはまった、相当な屋敷に生まれて、高等学校を卒業するまでそこで育ち、大学生活のため東京に出てから四年間は、下宿代は払ったが、家賃を払うには致らず、旅順で教師になって、終戦後引揚げて来るまでも官舎住まい、一時は椅子テーブルから窓のカーテンまで支給される、結構な御身分だったので、家賃を払った経験を格別記憶しているわけである。

甲府を発つとき、甲府駅に見送りに来てくれた人数

の多さには吃驚した。いつの間にか私には各方面との様々なつながりが出来ていたものと見える。H教授の顔が真中に見えたが、そのときの私はまだ、教授の心況について何も気付いていなくて、唯ひたすら恐縮していた。H教授にしてみれば、やれ／＼これで厄介払いができるということだったのであろう。

私がT女子大に着任したのは昭和三十二年三月二十九日に当るらしいから、私は時にとって四十五才、長男は十五才、長女は十三才、二男は九才だったことになる。長男N高、長女と二男は夫々近所の中学と小学校に編入させて貰ったが、やがて女の子の高校進学が問題になった。そのことで大変お世話になったのがT女子大第一回の卒業生で、英文科の主任教授でもあったA先生である。いろんな私立女子校を調べ、実地検分までして下さった揚句が、K女子学園がよからうと云うことになった。御自分にお子さんになかったという事情もあったかもしれない。大変な熱の入れようで感激した。兎に角転任族にとって、子供の転校がいっても大変な問題になるのだということを、この時あらためて実感させられた。

A先生はT女子大と大通り一つを距てたと云つてよ

い程のところに住んでおられ、夫君の帰りが日常的に遅かったせいもあって、度々女子大キャンパス内の私共の処に来て下さり、晩の食事を御一緒にすることもよくあった。その時の話では

「今頃転任して来たのでは、このまゝ、定年まで勤続するとしても、何しろ年数が足りないから、年金も貰えないし、名誉教授にもなれないし、兎に角なんの特典にもあずかれないから覚悟しておくように」とのことであつた。そしてそれは略々その通りになったのだが、私は生来こういう事にはまるで無関心な性である。茨城から山梨に移るときにも、私はすべての特権、恩典を断わり、それを七年間貫き通したものだ。A先生に覚悟をしろと云われても、別に何の感慨もなく、「あゝ、そうですか」と返答しただけである。私にしても家族は養わなければならぬから、本務に対する俸給は頂くけれども、それ以外の働きに対しては、一切報酬を期待しないというのが私の癖になっている。そう云えば女子大就任後間もなく、家内が叔父の銀行家に、私の月給の多寡を尋ねられて、正直に返答したところ、叔父は大層驚き、

「それは自分の銀行の初任給だよ」と呆れられたと

後に聞いたが、私は只銀行員というものは法外な高給を喰んでいるものだなと思っただけであつた。

さて、甲府で逃^{あつ}えた二段ベッドや食堂用のテーブルなどが、大学構内のプレハブに、夫々処を得たところへ、ある日事務長が現われた。家族の落付き具合でも見に来て呉れたのかと思つたら、彼には別の用件があつた。

「先生は山梨大学から今月分の給料を貰っていますね」ということである。これには経緯^{きゐ}があつた。私の山梨大学辞任が決まつたところで、A学長が事務局長と相談して、私の七年間の働きに対してボーナスを出したいが、私の辞任を三月末日でなく、四月一日付にして、四月分の給与をそれに当てたい、ということである。私は即座に

「それでは月給の二重取りになるではありませんか」と抗議した。これに対して事務局長は

「国立大と私立大では、系統が違ふので、問題はありません」とのことであつた。私は黙つた。T女子大の学長はそれを見咎めたのである。私はその経緯を山梨大に知らせることをせず、T女子大にモノ申すこともせず、T女子大が私に課した勤めの方は精一杯果した。

これは例によつて迂闊にも、定年間近になつて気付かされたことなのだが、私のT女子大着任は公式には四月ではなく、五月一日になつていた。私は結局四月一杯無資格のまゝ、仕事だけは果したことになる。むかし多賀工専では

「着任前に働いて貰つては困る」と、庶務課長が文句を言いに来たのを思い出した。好対照だなと思つたが、只それだけのことであつた。

T女子大のT学長が、私に対して何故かういう処置をしたのか。私には素より自分が悪事を働いた覚えがない。只私がT女子大に来たのは、T学長の斡旋^{くわんせん}によるものではなく、元学長のS先生の推挙によるものであつた。T学長はS元学長に、直接異議申し立てが憚られるので、私をスケープゴートにしたのではないかと。そして御当人は倫理の、正邪の問題として私を咎めたのではないかと、私は思い続けている。諄^{しん}いようだが私は、前記の通り、本件を山梨大に知らせることは一切せず、T学長に抗議することもしなかつた。今となつては私以外全員故人だから、問題はすべて過去のことである。因みにT学長は、T大の、独立間もない心理学科の卒業生で、世襲のクリスチャンであると聞

いた。

辞書によると、scapegoatとは、「古代ユダヤで贖いの日に、民の罪を負わせて荒野に放した山羊」とあるから、私の前記の推測が当たっていれば、私はその「山羊」にされたことになる。T学長に云わせれば、

「いや、そんなことではない。君は給料泥棒だ」ということになるのであろう。

茲で私の連想する句がもう一つある。歎異抄の有名な一句である。

善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや

因みにT女子大のモットーは Service and Sacrifice で、Sの字二つを組合わせて校章にしている。「犠牲と奉仕」には私の場合のようなケースもあるのだなど、家内と苦笑し合ったことであつた。

さて、住居のことを取纏めて置こう。

前記のように、大学構内の家は、貸与期間が三年であると申渡されていたので、A先生をはじめ色々の人達が、土地を探して下さつた。ある時私の山梨時代、私の宿舎に入り浸っていたA君が、その頃はK電鉄の社員になっていて、調布飛行場近くの土地を見ようと誘ってくれたので、一緒に出掛けた帰り途、偶然

深大寺の近くに大きな売地の看板を見掛けて立寄つたのが、現在の我が家の敷地なのである。その土地会社の社長さんが、むかし上海にあつた同文書院という学校の校長さんであつたのに気付いて、なんとなく信用する気分になって、二区劃百十坪余りを手に入れることにした。氣に入っている。支払いのためには、A先生の計らいでT女子大から借金をしたが、住宅金融公庫というもののお世話にもなつた。A先生から「借金することは今では恥ではない」というお説教があつた。日本の経済事情が右肩上りになろうという矢先であつたのも幸いして、この借金は思ひの外に短期間に返済することが出来た。家の設計を頼むことになつたSさんに、

「思い通りの設計をして見て御覧なさい」と言われて、照れながら略図を書いて見せたら

「これでは二階が落ちますよ」と笑われたのは、今も口惜しく懐かしい。Sさんは女子大構内の家も参考に。つまり私の意向も汲んで、設計をして下さつた。今も御縁が続いている。

その時の棟梁は昼飯どきから酒を飲んでいるような男で、建つた家の造作はもう一つ氣に入らなかつたが、

兎に角三年住まわせて貰ったプレハブを、キッチリ三年目に明け渡すことが出来て、事務長に「模範生ですな」と冷やかされたことであつた。

「模範生」が外にも自分に言い聞かせたことがある。私はそれまでずっと男の子ばかりの学校に勤めて来たので、女性ばかりの大学に移るとなると、身構えざるを得なかつた。そこで思い付いた第一は、出来る限り目立たぬようにすることである。真先に考えたのは服装のことであつた。仕事着を努めて地味で目立たぬものにする、つまり野暮を心掛けることである。洋服はもとより、ネクタイや靴下なども、派手な色や模様は一切避けるよう心掛けることを我が身に申し付けた。後年、定年退職後に、卒業生の一人から

「先生は近頃大分派手なシャツなどお召しになつて、若返られましたね。私が学生の頃は大層地味な格好をしてらした」と言われ、我が意を得たと北叟笑んだことであつた。まだある。もう一つは学生たちの名前を覚えないことである。何しろ百人単位の美人達を相手にするのだから、その名前を全部覚えろと言われても困るが、一部分だけ覚えるのは、別の意味で、尚困るのである。昔、二等兵にされた時、分隊長の兵長が、

我々の到着以前に、こちらの名前を全部覚えていたらしいのに気付いて、これは人心収攬の名手だなと、感じ入ったことであつたが、この際はこの手は禁じ手だなと思つた。

あの頃の英文科は大ハヤリであつた。書類上の定員はたしか八十名だつたと思うが、実際は百十名位は採つていた。因みに山梨大での定員は十五名で、その倍近くを採つていたが、女子大に来て、教務課で聞いたら、桁が一つ違つていて、思わず声をあげて教務主任のおばさんに笑われた。

あの当時丁女子大は、入学を許可する人数が、ほかの私立大に比べて、かなり少なく、私など大いに感心したものだが、その上入学初年度は夫々の進路を自ら考えさせる意味で、科別には採らず、二年次に進む時に学科を決めさせることになつていて、私はこれにも賛成だったが、その際英文科の志望者が、他学科に比べて格別多かつたのだ。その結果英文科では、相当数を「落とす」ことになる。落としたとしても丁女子大の学生であることに変わりはないわけなので、これが他の学科には気に入らない。中でも史学科のO教授は、何彼と英文科にケチをつけた。

「英文科は自分とこの折り糟かすを、こつちに廻して寄越しおる」と不服を言っていると噂に聞いた。しかし、これは仕方のないことであつた。英文科がワザとやったことではなかつたのである。前年にすでに数理科に合格していた娘さんを、ワザワザ退学させて、翌年英文科に入り直させた父親もいた位で、その父親に私は訪ねてこられた時文句を言つたが、後の祭りであつた。その娘さんと私は今も付き合っている。

学生時代、私は暇さえあれば武蔵野を歩きまわつた。「キミは田舎に出ると俄かに元気になるな」と云われたものだ。国木田独歩の影響もあつたかもしれない。今の中央線を、「省線電車」に乗つて、高尾方面へ駆け出し、途中気の向いた駅で降りて歩き出すのだ。地図などは持つていない。只闇雲に歩くのだ。それが楽しかった。こういう無計画ぶりは、今も尾を引いている。お蔭で、と云うのも変だが、私は四年間も歩きながら、「深大寺」には一度も行き当らなかつた。

その深大寺界限かいぎんに住みつくことになって、私はバスで西荻窪の「女子大前」まで行くことになる。それを数回続けたところで、フト気付いたことがある。山梨から講義に通つた一年間、私は女子大の誰かに教わつ

た通り、甲府駅から高尾を経て、吉祥寺を通り越し、「西荻窪」まで行つて。そこから「吉祥寺」行のバスで「女子大前」まで引返していたのだ。甲府から云えば一つ手前の「吉祥寺」で降りれば、運賃も時間も節約になつたのに、という訳である。

「深大寺入口」から「吉祥寺」に出る路は、当時惨憺たる荒れようであつた。女車掌さんが「玄海灘」と称して、乗客に頭などぶつけて怪我をしないよう、注意を促すほどであつた。それが俄かに立派になつたのは、どうやらオリンピックが東京で開かれることになつたお蔭らしい。

T女子大には当時アメリカやカナダから、通称フルブライト教授と呼ばれた、大学の先生方が、原則一年の契約で来てくれていたが、その一人が今も私の付き合っているイタリー系アメリカ人で詩人の、タリアブエ (Taliahue) 氏である。私は当時外国のお客があると思ふ羽田へ、彼又は彼女が着くのを迎えに行つたものだ。飛行機から降りてきたT氏は、背丈が私とほぼ同じ位であつたので、雲衝く大男を予想していた私はひどく気が楽になつた。彼は若々しい声でしきりに話しかけて来る。こちらはそれに当意即妙に応答はむつ

かしい。それを察したかのように、彼は矢継ぎ早にしゃべって、私にものを言わせない。私は早速「この男となら気楽につき合えそうだな」と思った。丁度お昼どきになったので、私は彼を銀座のテンプラ屋に案内して、わざと畳敷きの部屋を並び、彼には足を投げ出すよう勧めた。するとその途端グラグラッとかかなりの地震があった。私は日本ではこんなことは毎日のように起ることなのだからと言った。彼は私の懸念にも拘らずケロッとしている。後で段々判ったことだが、彼はついこの間までレバノンに居たし、その他東南アジア諸国を手広く、家族連れで廻っていたらしいのだ。それから私共は女子大に行き、私は彼を構内のライシャワー館という外国のお客用の宿舎に案内した。彼はそこには落付きたがらなくて、数日後から貸家探しが始まった。純日本風の家に住みたいという注文である。家族を呼び寄せたいから一戸建てが望ましいと言う。あちこち当った揚句、荻窪駅の近くに一軒農家が見付かった。言うまでもなく草葺き屋根、総畳敷の一軒家である。私はいささか心配になって、先づ「冷蔵庫が必要じゃないか」と言ってみた。

「家全体が冷蔵庫だから、要らない」という返事で

ある。重ねて自動車クルマを入れる車庫が要るね、と訊いたら

「日本に路があるか」と来た。私はこの時初めて *would-be road* という言葉を聞いた。日本には未だ *would-be road* しかないではないかと言うのだ。道らしい道のない処で車を持つ必要はない、という訳である。先方の言い方次第では、私はムカついて離れてしまったかも知れないが、ありようは

「こいつは面白そうだな」と、つい思ってしまった。イタリー人にはこういう味があるんだなという思いがあった。

しばらくして彼はメイン州の彼の家から、奥さんとまだ十代の二人の娘さんを呼び寄せた。娘さんたちは早速日本人の小学校に入って、これも私を驚かせた。もっと驚いたのは暫くして奥さんが、経師屋に弟子入りしたいと言い出したことだ。荻窪に経師屋の知り合いなどないので、私は女子大の正門の筋向いに一軒見慣れていたのを思い出し、そこへ折入って頼みに行つて見たが、体よく断られた。外国語のわかる経師屋なんて滅多にいるものではないからと、私は奥さんあきらに諦めてもらった。何しろ一家を挙げて好奇心旺盛な、

羨しい人達であった。Tさんはその年の夏休み、何処かの男子学生を道案内にして、四国八十八箇所巡りをやり遂げた。下駄を四足穿きつぶしたと自慢しに来た。どうやら日本がすっかり気に入ったらしく、滞在をもう一年延ばしたいと言ひ出して、その面倒な手続きも手伝わされた。

丁度その頃私の深大寺の家が出来上った。A先生の勧めで open house というものをやることになった。今でこそオープンハウスはもう日本語だが、私には耳新しく、どうしてよいのか判らなかつたが、要するに英文科のスタッフ全員を招いて昼食会ということになった。広くもない家が満員になった。中にこれは専任講師でイギリス人の Strong さんもいた。奥さんが日本人であつた。大分みんなが食べ飽きたところで、Tさんが苗木を植えたばかりの庭に飛び出した。頭にチョン髷のカツラをかぶっている。A先生が進呈したものらしい。Tさんは手踊りのような仕草をしながら一しきり歌舞伎の声色らしき奇声をあげて私達を笑わせた。ところが笑わない人が一人いた。ストロングさんである。苦虫を噛みつぶしたような顔で「あいづ奴、仕様がないな」と御機嫌斜めである。同じヨーロッパ

でも、お国柄でこうも違うものかと、私は興がった。わが家が満員になったことがもう一度ある。数年後のこと、担任を仰せつかった一クラス全体が、四十数名、卒業論文を無事提出してホッとしたと、揃つてわが家に押し寄せたのである。後から「松ずし」とやらの小トラックが、お嬢さん達の「おひる」を届けて来て、流石は女の子はやるのが細かいなと感心したものである。夕方まで膝つき合せて騒いだ次ぎの朝、隣の奥さんに「きのうは一体何事だったのですか」と尋ねられて恐縮した。別に抗議を申込むという口調ではなかつたのは仕合わせであつた。

新築のわが家についても一つ思い出すことがある。女子大構内から移った翌日、テンヤワンヤの中へ大学同期のY君が新築祝ひに来てくれた。舟底天井の客間に招じ入れて祝詞を受けた。しばらく室内を打眺めていたY君が「電話は何処だ」と訊いた。「そんなものはない」と答えたら、「すぐ申込むことだな」と言う。そこで私が天井を指さして

「キミ、この梁はりの材木の名前を知ってるか」と言う
と、勿論相手は怪訝な顔付きになる。すかさず私が「借金シャッキンと云うんだよ」と答えたものだ。そのあと彼が

真剣な顔付きになって言った。

「本当に君はそんなに貧乏なのか。僕は君がいい処のお坊っちゃんだとばかり思ってた」と仰言る。^{おっしゃる}

実はY君の父上は大阪で古参の中学校長をして居られたが、Y君が大学に入って間もなく病死してしまわれたのだそうで、長男のY君はそれ以来、学生的身で、あちこち家庭教師をして廻って、お金を稼ぎ、生活費にもし、何人か居た弟さん達の学資にも当てたというのである。

「僕は卒業して中学の教師にでもなったら、収入が減って、家族が養えなくなるんだ」と聞かされて「へええ、そういう人もいるのか」と半ば呆れ顔になった私の顔を眺めて

「お坊っちゃんだな、此奴は」とY君は思ったに相違ない。

数日後彼は「R大学に非常勤で行かないか」と言いに来てくれ、爾来十六年間私はそのお蔭を蒙り、勿論電話はすぐ申込んだ。

そのR大学に通ううちに、世の中が格段に騒がしくなった。安保闘争とやらで、学生運動が激しくなったのである。行く度に学生が勇ましい格好で演説してる

のを、毎度見かけるようになった。演者はどうやら台本の通り、指令に忠実にしゃべっているらしくて、耳を澄ますが、何を言っているのがサッパリ判らない。そこである日、私は弁士の足許まで行って

「キミ、ばくに判るようにモノを言ってくれないか」と、穏やかに話しかけてみた。弁士は全然相手にしない風でしゃべり続ける。そこへ近くの建物から若い男の人が駆け出して来て、私の腕をムズと掴んで、有無を言わさず建物の中へ引張りこんだ。

「先生、ダメですよ、あんなことなさっちゃ。殺されますよ」とその人は私を叱った。学生部の人だった。

ものを判りたいという善意が、素直には通じない世の中になつていたのだ。

私は考えた。この大学に今起っていることが、T女子大にも移って来ないという保証はない。T女子大にこういう事態に即応できる人物が果しているだろうか。どうも居そうな気がしない。どこからかそういう人を連れて来て置かないと、困ったことになる。私はそう思った。

私は当時已むを得ず学科主任を勤めていた。それまで私は定年に達した先輩か、同窓の誰かに頼み込んで、

T女子大に来て主任になって貰い、私は一歩さがっていたのだが、その時ばかりは格好な人が見付からなくていたのである。ところが丁度その時、私の脳裡にある人物が浮かんだ。その年岡山大学を定年になるK氏のことである。K氏は私の数年先輩だが、私の学生時代、大学院に居残っていて、私の聴講する講義に彼も時々来合わせて、一番うしろの席から時々講師の先生に向かつて半量を入れる。講師の先生には迷惑だったのかも知れないが、私はその薬味の利きっぷりに感心し、卒業後もその人の動静を見失なわないように努めていたのだ。

私は教室会議に、K氏を教授として迎えることを提案し、どうやら承認を得た。事の順序として、私が岡山へK氏を迎えに行くことになった。

私は京都に途中下車して、子供のときから父の言い付けで時々行ったことのある、八坂神社の前の菓子屋に立寄って、「与市兵衛」という、おむすびの形をした蒸菓子の折を作って貰って、それを土産に岡山に乗り込んだ。K氏を大学の官舎に訪ねると、彼はにこやかに私を迎えてくれたが、対座している卓の上に、厚さがどう見ても十センチ以上はある古新聞包みが置いて

ある。

K氏が言う。

「きのう別の大学の人が数人に来て、これを置いて行きおった」

「一体何ですか、それは」

「札束だよ」

ということになって、これはこっちの負けだなど、私は直感した。

「それじゃあそっちへ行く積りですね」

私は念のため尋ねた。

「いや、君んどこへ行くよ」

これがK氏の端的な答で、話しはアツという間に片付いた。

そんな訳でK氏はT女子大英文科の主任になって呉れたが、その年に文理学部長の選挙があることになった。私はK氏が立候補して呉ればよいがと思った。競争相手は哲学科の教授であった。顔は思い浮かぶが、名前が出てこない。血色のよい、弁の立つ人で、私は強敵だなと思った。Kさん一家は元私共が三年間住まわせて貰ったプレハブ住宅に、取敢えず入っていたので、連絡はとりやすかった。私はK氏のところへ行っ

て、

「この選挙は際どい票差になると思う。私は根廻しなどをしている訳ではないので、予測も何も出来ないが、若し当選したら、どうか断らないでほしい」と頼んだ。

恐れた通り、学生騒動はT女子大にも感染していた。

K氏は日夜を措かず活動学生と渡り逢うようになった。K氏の息子さんの話では、

「親父は何しろ喧嘩好きですから、眼を輝やかしますよ」ということであつた。騒動の末期には、ケンカでは歯が立たないのに業を煮やした学生の一人が、締め切った正門の鉄扉越しに、大バケツ一杯の水を、応対に出たK氏に浴びせた日もあつた。

私もちよく／＼学生達の「吊るし上げ」に遇つた。

詰めれば二百人位はいる教室一杯に集まった学生達の前に、私一人が引き出されて、攻められるのである。初めのうちは少々怯えていたが、そのうちに一人の学生が、

「デメーのような奴が、われわれの採点をするなどとは怪しからん」と言い出した。そこで私が

「私だって採点は大嫌いだ。やめろと言うならやめ

てもいいが、教授会にかけて承認を得る必要があるから、チョットひまが要る。それに採点をやめたら、評価の材料がなくなるから、進級や就職が面倒になるかもね」と言つたら、「それは困る」と云う。途端に私はホッして、怯えがスーッとなくなつた。みんなの腰が据わつてないと思つたからである。

ある日のこと、正門前の舗装道路を歩いていたら

「コラ、その教授」と呼び止められた。私は咄嗟に「なるほど、『教授』は敬語じゃないんだな。『コラ、その先生』では格好がつかないわ」と思つた。次ぎの瞬間近付いた学生が、持っていた木刀で、私の向脛をカツ拂つた。痛かつた。あとで聞いたたら、彼女は日本海側のさる町のお医者さんのお嬢さんで、テンカン持ちだとのことであつた。

学生たちは初めは、講義をさせまいと、教室を次々に占據して行つたが、やがてエスカレートして、建物全体を次々に占領するようになった。教師の側は連日、昼から深夜まで「教授会」を開いて協議するのだが、なにも決らない。

ある夜遅く、恒例の吉祥寺まで歩く元氣もなくなつて、タクシーを拾つたら、運転手が

「こんな時間のお客さんにしては、アルコールの臭いがしませんね」と冷やかした。

「毎日毎晩小田原評定でね。一杯飲むどころじゃないんだよ」と私は応じた。それから何日目かに乗ったのが偶々前と同じ運転手で、

「まだやってるんですか」と呆れられたのは恥しかった。

略々一年経つうちに、学生の方も流石にくたびれたらしい。騒ぎはなんとなく収まつて行つた。翌年の二月ごろ一人の学生が研究室と称する私の部屋に来て「私たちは一体何をしたと云うんでしょう」と言つて、泣き出した。闘争学生の一人らしかった。

こうなると、こちらには意味にかゝるより仕様がなない。君達がやったことには意味があつたんだよ。君等の運動のお蔭で、一般民衆が黙っていなくなつたじゃないか。あちらでもこちらでも市民運動が起つて、昔なら押し潰されて、泣き寝入りしてた処を、この頃は市民の方が勝つようになったじゃないか」

私はまんざら口先ばかりとは云えない感想を述べて、相手に涙を拭かせた。

この一年の混乱のあと、今迄深大寺に、折さえあれ

ばやって来ていた学生たちが、パツタリ来なくなった。たまに来てても、それは紛争以前の卒業生ばかりということになっている。

何故そうなつたかは、学園を離れて久しい今の私には、見当がつかぬ。

T女子大に来て、いきなり担任ということになった四年生たちも、今はいよいよおば様になつてゐるらしい。私は今もその年代の幾人かに、月例の集まりで遇うのだが、相手が学生であつた頃のわが身の気分が抜け切らないで、つい教師面をして仕舞う。教師とは仕合わせない職業だなど、つく／＼思う。昨年はチョット健康を害して、偶然かかつたお医者さまとウマが合つて、「あなたの心臓はモノスゴク丈夫だ」などと真顔で言われると、なんだか嬉しいような、照れ臭いような心地になつてゐる。

(二〇〇二・二・二)